
魔法少女リリカルなのはSS 紫電のキバ

ラキ★メン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはSS 紫電のキバ

【Nコード】

N3612K

【作者名】

ラキ★メン

【あらすじ】

「人を助けるのに理由なんているんですか？」

それは、人が奏でる音楽を守る少年の物語である

＊オリジナル主人公、オリジナル設定、時間軸はJS事件中です。

第一話（前書き）

どうもラキ★メンです。

自分は文章力がないのでつまらないと思いますがどうぞよろしくお願ひします。

それと、キバや、リリなのに関しては（特にリリなの）うろ覚えのところが多々あるのですね

誤字などがありましたらすいません m () m

第一話

??? side

「此処は、どこだろう？」

と、中肉中背の人柄の良さそうな何かのケースを持った少年がつぶやいた。

「ふむ、少なくとも我等が先ほどまでいた場所とはだいぶ違うところみたいだな。」

それに答えたのは、蝙蝠のような姿をしたような生き物が答えた。

「ん！？何か来るみたい、行くよキバット！」

少年は、周りを見ながら警戒しながら言った。

「ああ、赴くか紫苑」

そう言う一人と一匹は走り始めた。

??? side out

第一話（後書き）

短くてすいません m

┌

└

m

第二話

??? side

「部隊長、クラナガン郊外に次元震とガジェットの反応が!？」

モニターに反応が出てるのを、驚愕まじりの顔で自分の部隊の上官に告げた。

「分かった、反応が出たポイントなのはちゃん達を向かわせるわ」
セミロングで顔立ちが整った、関西弁訛りの女性が答えた。

「はやてちゃん、今次元震の反応が!」

栗色で腰までありそうな髪をツインテールにして、白く所々青いライン、そして魔法使いが持つに近いメカニカルな杖を持っている女性と黒く金髪で、栗色の女性が持っているのと雰囲気と同じだが形が死神の持つような鎌に、白いマント来た女性が通信してきた。

「うん、こっちでも次元震とガジェット反応が出たわ、悪いけどそのポイントに行ってもらえるかな、なのはちゃん、フェイトちゃん」

「え!、ガジェットも!？」

金髪の女性、フェイトが驚きを隠せず呟いた。

「うん、わかった、すぐその場所に行ってみるね」

栗色の女性、なのはが頷きながら答えた。

「よろしく頼むで二人とも」

はやてがそう言うのと二人は、通信を切った。

???
side out

紫苑 side

「なんか嫌な感じがするなあ」

不安そうな声で紫苑は呟いた。

「心配する事はない我がついている」

キバットそう言いながら何かを警戒するように紫苑の周りを飛んでいる

ガサガサ、まるで木や草など関係ないかのように、何かが紫苑達の前に現れた。

「なんだこれ!?!」

いきなり出てきて紫苑はびっくりしその場に立ちすくんでしまい、ガジェット達はチャンスとばかりに紫苑を攻撃しようとする

「危ない!、紫苑そこから離れるのだ!!」

キバットは紫苑に注意する

「え?・・・うわあああああああああ」

紫苑 side out

なのは side

わたしとフェイトちゃんは、送られてきた情報をたどって、ポイント周辺に来てみたら、そこにはガジェットと何かのケースを持った

少年と蝙蝠のような生き物がいた。

「なのは！」

「うん、フェイトちゃん」

わたし達は、そう言うとかジエツトに囲まれてる少年のもとへ急いでかけつけ、少年の前に防御魔法を張った。

なのは side out

紫苑 side

「え?・・・うわああああああああ」

僕は、そう叫ぶと目を瞑り腕を顔の前まであげた。

(あれ?、痛みが来ない・・・?)

そう思い前を見上げると

「大丈夫？、怪我とかしてない？」

髪の毛が栗色で白い服を着た人と金髪で黒い服を着た女の人達が自分を守ってくれていた。

「あつ、はい、なんとも無いです、あなた達は……」

「話はこれ皆たおしてからね」

金髪の女の人が出た。

「フェイトちゃん、倒してもきりが無いよお」

どうやら会話してる最中に敵を倒していたらしい

「うん、どうしようか……今から応援呼んでも時間かかりそうだし、いくら雑魚でもこの数相手じゃ少し厳しいね……」

金髪の人……フェイトさんと言う人は少し顔をしかめた。

「……っ！危ない」

僕は、攻撃に気づき二人に教えた。

三人は横へ跳び相手の攻撃を回避した。

「くっ、このままじゃ……」

「僕も戦います！」

「えっ！？でも君は、一般人だし・・・」

「大丈夫です・・・キバット！」

「任せろ・・・ガブリ」

紫苑が頭上に手を掲げると腰にベルトが巻かれ、キバットを掴み自分の手に噛み付かせる、すると紫苑の顔にステンドグラスの模様がうかび、キバットをベルトの止まり木にぶら下げると銀色のガラスの様な物に包まれ、そしてガラスの様な物がはじけ飛ぶとそこには黒と暗い紫の鎧包まれた紫苑が居た。

「さて、行くかな」

「さっきの君だよね？」

フェイトが怪訝そうな目で聞く

「そうですよ、それじゃあ行きますね」

紫苑は敵のもとへ行った。

「わたし達も行こうフェイトちゃん」

「そうだね、なのは」

なのは達も敵のもとへ行った

「うーん一気に敵を片付けちゃうかな・・・行くよキバット！」

「分かった、紫苑」

「「ウエイクアップ!!」」

キバットがフェッスルを吹くとヘルズゲートが開放しカテナがはずれ昼なのに闇夜がおとずれる

「え、夜!？」

なのはとフェイトいきなり夜になって驚く

「なのは、もしかしてあの子ロストログア使ってるんじゃない?」

「うーんちよつと分からないかも、戦闘が終わったらあの子にお話してみよっか」

その頃紫苑は・・・

「はああああ・・・ふん」

紫苑はジャンプそのまま「ダークネスムーンブレイク」をガジェットにきめると地面にキバの紋章が刻まれ、次々とガジェットが粉碎していき、ガジェットは全機潰れた。

「ふう、あく怖かった。」

「すみません時空管理局の高町なのはは一等空尉です、ここに居た理由とさっきの事説明して貰ってもいいですか?」

「へ？時空管理局？なんですかそれ？」

紫苑SIDE OUT

第二話（後書き）

前よりやや長めに書いて見ました。

それにまだうろ覚えなのでおかしなところがいっぱいあるかもしれま
せんのすいません m (_) m

第三話（前書き）

戦闘描写が難しい・・・

文才ないので駄文になると思いますが頑張ります！

第三話

紫苑 side

「へ？管理局？なんですかそれ？」

ついさっきまでの姿ではなく少年の姿に戻っている紫苑がいた。

「え！？管理局を知らないの？」

驚いた顔をしたのが聞いた。

「はい・・・」

（なのは、この子は次元漂流者なんじゃないのかな）

（うん、きっとそうかもね）

「えーと、いくつか聞きたい事があるから一緒に隊舎に来てもらっていいかな」

「すみません、ちょっと待ってもらってもいいですか？」

「うん、いいよ」

なのはから了承を得ると紫苑達は、少しなのはから離れキバットと相談し始めた。

「ねえキバットこうゆう時どうした方がいいかな？」

紫苑は困り果てた顔でキバットに質問した。

「ここは、一旦あやつ等の言うことを聞くとしよう、それにあやつ等の使った力は、恐らく我等の世界の物じゃないようだしな」

「え!?!?じゃあここは地球じゃないの!?!?」

驚愕を隠しきれずにいると、キバットは紫苑を落ち着かせながら話を続ける

「うむ、あやつ等の力はまず地球の技術では到達できぬ場所の力だ、考えてみる、人が何の動力もなくして空を飛ぶか?」

「まあ普通は飛ばないと思う」

紫苑は、冷静をとりもどす。

「そして、それらを考慮すると、あやつ等に同行し、この世界の情報を得る事を優先した方がよさそうだと思う」

キバットは、意見を提案する

「じゃあ、あの人達について行こうか、それにあの人達は優しそうだし」

紫苑 s i d e o u t

なのは s i d e

彼は、決心がついたのかこちらに戻ってくる

「もういいかな」

なのはは、笑顔で返答を待つ

「いいですよ」

なのはの笑顔につられたのか紫苑も笑顔でかえす。

「ありがとう／＼／＼（え！？なんかすごくだキドキする）えっと君の名前は……」

なのはは、顔が赤くなりつつも聞く

「あ、すみません、僕の名前は紫苑、紅 紫苑です、こっちが友達のキバットです。」

「私の名はキバット・バット五世だ。」

自分達の自己紹介が終わると次はフェイトが自己紹介する

「私は、執務官のフェイト、フェイト・テストロッサ・ハラオウンです、よろしく」

若干警戒しながらも、にこやかに挨拶した

「こちらこそよろしくお願いします。」

紫苑もにこやか返事をした。

「それじゃあ行こっか」

なのはside out

機動六課 隊舎前

「ここが機動六課・・・」

思っていたより隊舎は大きく周りも綺麗だった。

「うん、ここが私達が働いている機動六課だよ、さっきも飛んでる最中に言っただけじゃなく紫苑君には、ここにいてもらうと思うから改めてよろしくだね」

ちなみに、紫苑は移動の最中に色々説明された、時空管理局の事、次元漂流者の事、ロストログアの事など色々なことを

「じゃあ今からこの隊の部隊長さんのところに案内するからついてきてね」

なのはは、そう言うと言舎の中に入って行く、そして廊下に差し掛かるとピンク色にポニーテールの女の人がこちらに来た

「高町、これが連絡にあった・・・」

「紅 紫苑です、それでこっちが友達のキバットです。」

「キバット・バット五世だ。」

「私はシグナムだ、よろしく」

挨拶が終わり話ながら歩いていたら、部隊長室についた。

はやてside

紫苑達がつく少し前、ある映像を見てるはやて、それは紫苑がキバに変身し戦っている時の映像

「この人、すごいです」

体の大きさが約30センチ位の女の子がしゃべる

「確かに、AMFなんかまったく関係ないような感じでどんどんガジェットを倒していくし、はつきり言ってこれは反則気味の強さや」

今映し出されている映像は、紫苑の戦闘映像である

「どんな人なんやろなあ、なあリイン」

「そうですねはやてちゃん」

はやてside out

紫苑side

「失礼しまあす。」

なのは達に続いて入るとそこには隊長が座るに相応しい椅子に座った一人の女の人と大きさ30センチ位の女の子がいた。

「始めまして私がこの機動六課の部隊長八神はやてです、よろしく」

八神さんと手を出し握手する

「はい、こちらこそよろしくお願いします」

紫苑 side out

第三話（後書き）

自分なり書いてみたんですがどうでしたか？

主人公設定（前書き）

ちよつとここで主人公設定です。

主人公設定

詳細

紅 紫苑 (くれない しおん)

年齢 17才

身長 175cm

出身世界 平行世界の地球

誕生日 7月30日

好きなもの or 人

オムライス、ココア、ヴァイオリンを弾くこと、キバット

嫌いなものor人

糸蒔蒔、ゴーヤ、音楽を壊す奴

性格

内向的、やや控えめで人見知りが激しい性格の持ち主で、あまり人との関わりがない

根は優しいがいつも遠慮がちなので思ったことを口にできずに自分でもいつも困り果ててる事が多い

父親の所為で基本は、しっかりしているので料理に掃除に洗濯なんでもできる

容姿

髪の色は黒で長さは肩にかかる位で瞳の色は薄い紫である

顔だちは年齢より若干押さなく見える（ようは童顔）

元々美形なのであまり童顔は目立っていない

特徴があるのは額の左側から眉毛辺りまである傷が特徴といえる

装備

紫電のキバ

紫電のキバとは黄金のキバが作られる前に出来たキバの鎧だが物凄いい力を喰うのでだれも使えず

お蔵入りだったのを紫苑が見つけた使用している、因みに黄金のキバ同様フォームチェンジ能力は

付いているが基本のセーブフォーム（二話で出てきた奴）ファイナルウェイクアップによって鎧に

掛かっている封印を解いたエンペラーフォームだけである

フェッスルの種類はドラゴン、ウェイクアップ、ファイナルウェイクアップとまだ他にもあるがそれは

後ほど

第四話

部隊長室

「はい、こちらこそよろしく願いします。」

紫苑はそう言う手差し出され手を握り返す。

「え」と紅　紫苑君で良かったかな」

書類をチラ見しながら言う

「はい」

紫苑は返事をする

「いくつか聞きたい事があるんだけどかまわへんか？」

「ええ、いいですよ」

「コホン、じゃあいくつか」

ワザとらしく咳払いしながら言う

「君はなんであの場所に居たんや？」

「家に帰ろうと歩いていたらいきなり光を浴びて気が付いたらあの場所に居たんです」

「どうやら紫苑君は本当に次元漂流者だね」

なのはが確定づけた。

「紫苑はなんて場所から来たんや？」

「僕は、地球って場所から来たんですけど・・・」

「「地球!?!」」

なのは、はやて、フェイトが驚いた顔で叫ぶ

「ええ・・・」

若干引いてる紫苑

「それならすぐ見つかるで」

「ふう〜良かった」

紫苑が安堵する

「今調べるてみるでまってなあ」

数時間後・・・

「居ない・・・」

苦い顔をして呟く

「どうゆう事なの、はやてちゃん？」

不思議そうにする

「紫苑君が地球に存在せえへん・・・」

「え・・・？」

紫苑が青い顔をする

「もしかして「パラレルワールドだな」」

今で肩にとまってたキバット言う

「でも、パラレルワールドだとしても帰れますよね……?」

「悪い、紫苑君今の管理局の技術では平行世界に行く手段は出来てないんや……」

バツの悪そうな顔をするはやて

「そんな……」

紫苑が絶望する

「でもなんとか手立てを見つけるから待ってくれへんか?」

「わかりました……。」

落ち込みながらも笑顔でかえす紫苑

「でもそうするとどうしよう」

考える一同

「それだったら、ここに居るってのはどうや?」

「でも民間者を置くわけにわ」

フェイトが呟く

「大丈夫や」

胸を張るはやて

「あの戦闘力なら民間協力者としてここにいられるで」

「でも紫苑君がなんていうか・・・」

「いいですよ」

あっさり許諾する紫苑

「いいの紫苑？」

申し訳なさそうな顔するフェイト

「どうせ帰れるか分からないのなら誰も知らない人が居る所より皆さんがいる所が良いです。」

笑顔で言う紫苑

「それと眠くなりましたしね」

もう外はかなり暗くなってる

「それなら部屋を案内するで」

「主はやて、それなら私が」

一歩前に出ながら言うシグナム

「じゃあお願いするわぁ私はまだ仕事があるから任せたで」

疲れた顔をするはやて

「はい、でわ行くぞ紅」

「はい、お願いします。」

二人は部屋をでる

「じゃあ私達も行くね、はやてちゃん」

手を振りながらなのはとフェイト部屋を出てく

「さあてもう一頑張りや」

そう言いながら作業に移っていったはやて

五話

「うーん……ふあ、パシ今日も頑張ろう」

まだ眠そうな脳を無理やり覚ますかのように頬を叩き喝をいれる
フエイト

「ちょっと早起きしちゃったなあ、少し散歩しよつと」

制服に着替え廊下に出ると



「なんだろう？ なにか聞こえる」

そう言いながら音の流れてくる方に体を進める

音の流れてる場所にたどり着いたフェイト

「誰が弾いてるんだろう・・・っ紫苑！」

（やっぱりおじいちゃんみたいな音は、まだ出せないか・・・

）

ザッザッザ

(ん? 誰か来たのかな?)

「あっ! フェイトさん、おはようございます。」

「うん、おはよう紫苑、綺麗な音がするヴァイオリンだね」

「え!、聞いてたんですか／＼」

顔を赤くしながら話す紫苑

「うん、ちょっと早く起きたから散歩してたらちょうど紫苑のヴァイオリンが聞こえたんだよ」

にこやかに喋るフェイト

「下手なヴァイオリンですいません」

頬をポリポリとかきながら苦笑する紫苑

「そんなことないよ、とっても上手だったよ」

「あはは、ありがとうございます、でもまだ駄目なんですよ、あの音じゃ」

「なんで？、あんなに上手なのに」

「おじいちゃんを超えたいんですけど、おじいちゃんみたいな音が出なくて」

「へえ〜どんな人なの」

「そうですねえ〜優しくて変わった人でした、そしていつも人の奏でる音楽を守っていました。」

「人の奏でる音楽？」

不思議そうな顔をするフェイト

「はい、人にはその人だけが奏でる音楽があるんです、もちろんフェイトさんにも」

微笑ながら言う紫苑、そして顔を赤くしながら聞くフェイト

「あっあの、私には、どんな音楽が聞こえる？」

「とても綺麗でまるで全てを包み込むような音楽が聞こえますよ」

目を瞑り音を聞きながら話す紫苑

「そっか、あ！、そろそろ時間だ、それじゃあまたね紫苑」

あわてて走り出すフェイト

「はい、またあとで」

紫苑もヴァイオリンをハードケースにいれ歩く

「それじゃあみんなに紹介するで新しく機動六課に入った民間協力者の紅 紫苑君や」

機動六課の職員一同に紹介される紫苑

「紅 紫苑です、よろしくお願いします。」

90度にお辞儀する紫苑

「まあそうゆう事やからみんなよろしゅうな」

職員一同は返事をし、自分の仕事に戻る

「よろしくお願いします紫苑さん」

「えっと君わ？」

「バカスバル、紫苑さんが困ってるじゃない」

髪の色がオレンジの子青髪の子に言った。

「ティアナ・ランスターです、よろしくお願いします、それとすいません紫苑さん」

「いや、別にいいよ」

苦笑いをしながら答える紫苑

「早くあいさつしなさいよ」

「スバル・ナカジマです、改めてお願いします。」

ナカジマさん元気よく挨拶してきたので僕も

「うん、こちらこそよろしくね」

僕が言い終わると今度は十歳位の男の子と女の子が

「エリオ・モンディアルです、よろしくお願いします、紫苑さん」

「キャロ・ル・ルシエです、よろしくお願いします、紫苑さん」

「うん、よろしくね、エリオ君、キャロちゃん」

四人と挨拶が終わるとなのはさんが

「それじゃあみんな訓練に行こうか」

「」「はい」「」

四人返事をする

「紫苑君の実力も、もう一度見たいし一緒に訓練どう？」

「はい、お願いします。」

訓練場

「とりあえず、紫苑君の実力をみんなに見せてあげたいから先にいい?」

「はい、いいですよ」

「それと始める前に紹介しておくねみんなもデバイスをメンテナンスや改良などをしてくれる」

「シャリオ・フィニーノです、シャーリーって呼んでね」

「じゃあ始めるけどなにか質問はないかな？」

「はい、紫苑さんのデバイスわ？」

「ないよ」

「」「」「えっ!？」」「」

「デバイスは無いけどそれに近いのはいるよ」

苦笑しながら答える紫苑

「とりあえず始めるね、準備はいい紫苑君？」

「はい」

「じゃあ20分以内にガジェット30機を破壊もしくは捕獲してねそれじゃスタート」

「キバット」

「分かった、ガブリ」

紫苑が手を上に掲げると蝙蝠のような生き物が手のひらに納まる、そして反対の手に蝙蝠のような生き物を噛み付かせると顔にステンドグラスのような模様が浮かび上がって腰にはベルトが巻かれ、ベルトの止まり木にキバットをぶら下げ・・・

「変身」

そう言っていると、体がガラスの様な物に覆われ、そして体に纏わりついていたガラスがはじけ飛ぶと現れたのわ紫苑ではなく、黒と暗い紫色の鎧に包まれたファンガイアを倒す仮面ライダーキバだった。

五話（後書き）

なんかグダグダですいません

第六話

「変身」

そう言っていると紫苑さんは、ガラスの様な物に包まれガラス状の物がはじけ飛ぶと黒と暗い紫色のした鎧を全身に纏っていた。

私達のバリアジャケットとは随分違う、まるで中世を思わせる騎士に見えた。

スバル・ナカジマはそう思った。

「なのはさん紫苑さんのあの姿わ？」

ティアナ・ランスター驚きと不審な目で紫苑を見ていた。

「私にも良く分からないんだけどあれが、紫苑君のバリアジャケットみたいなの」

申し訳なさそうな顔でティアナに返答する

「でも、凄くカッコイイです！」

目をキラキラさせ、言うエリオ

「うん、凄くカッコイイ！」

キャロも同意見のようだ。

その頃紫苑は・・・

「はっ！せい！」

キック、パンチをマシンガンのように次々とガジェットにあび

せていく

「キリが無いな、よし、アレで行こうキバット！」

紫苑は、キバットに黒いフェッスルをセットする

「まかせろ、こいティルフィング！」

キバットは、そう言いフェッスルを吹く

すると、晴れていた空が曇り、曇った空から剣が降って、地面に刺さる

キバがその剣を抜き取る、そしてティルフィングをガジェット達へと一振りする

「はぁ!!！」

すると目の前に居たガジェット全機消滅していた。

「ふう、終わった。」

そう言い変身を解く紫苑

変身を解いた瞬間スバル達が駆け寄ってきた。

「すごい威力でしたねあの剣！それにあの姿は何ですか？それに・
・」

「バカスバル！質問は一つずつしなさい」

ティアナは、拳骨でスバルの頭を叩く

「いたあゝ」

涙を浮かべ喋りだすスバル

「あのバリアジャケットは何ですか？」

「あれは、バリアジャケットって言うやつじゃなくてキバの鎧なんだ」

「キバの鎧？」

頭に疑問府を浮かべるスバル

「うん、元々はファンガイアを倒す為の鎧なんだよ」

「ファンガイア？」

こんどはエリオが疑問府を浮かべる

「これについては我が答えよう」

紫苑の周りを飛んでたキバット答える

「ファンガイアとは人のライフエナジー、分かりやすく言うと生命エネルギーを糧に生きる怪人達こそ事だ、まあもつとも今はファンガイアと人間は共存してるがな」

キバットが噛み砕いた説明をする

「へえ、じゃああの剣わ？なんか禍々しい感じがしましたけど」

「あれは、魔剣だよ」

「魔剣!？」

FW陣が驚く

「でもそれってロストログアとかなんじゃ・・・」

エリオが顔を引き吊りながら聞く

「もしかしたらロストログアかもしれないね」

紫苑がとんでもないことをさらっと言う

「それほんとなの紫苑君!？」

若干空気気味だったのはが聞く

「はぁ・・・でも大丈夫ですよ普段は封印してますから」

「そうなんだ」

なのは、FW陣で話していると・・・

「こいつが六課に入った奴か？」

赤毛で左右おさげにしてる小さな女の子が入ってきた。

「ヴィータちゃん」

「副隊長！」

「どうも、民間協力者の紅 紫苑です、よろしくお願いします。」

「鉄槌の騎士ヴィータだ。」

怪しむ目とそっけない感じで紫苑と喋る

「おいなのは、ホントにこいつ使えるのかよ、なんか弱そうだぞ」

「大丈夫だよ紫苑君は、凄く強いよ」

「まあ、なのはが言うなら良いけどよ」

すると突然なのはが

「あっ！、紫苑君の明日使う服を買うの忘れてた。」

「明日の服？」

紫苑が聞き返す

「うん、明日の任務で使う服何だけど、私は訓練とかがあるしどうしよう」

なのはが、困っていると

「どうしたの、なのは？」

ちょうどフェイトがやって来た。

「あ！フェイトちゃん、ちょうど良かった、明日の任務で使う紫苑君の服を買って来て貰えない？」

なのはが、バツの悪そうな顔で頼む

「うん良いよ、それじゃあ早速行こうか」

「はい、分かりました。」

フェイトについていく紫苑
隊舎からでてフェイトの車に乗り込む
フェイトが運転しながら話しかけてきた

「そういえば紫苑っていつもヴァイオリンもってるよね」

「はい、このヴァイオリンは僕のおじいちゃんが僕のために作ってくれたんです。」

嬉しそうに話す紫苑

「へえ〜でもホントに綺麗だね何か名前とかあるの？」

「はい、ブラックスターって言うんです。」

しばらくフェイトと他愛も無い話をし買い物を済ませ隊舎に帰った。

第六話（後書き）

次の章辺りでなにかしら発展させようと思います。

第七話（前書き）

英語やドイツ語が分からないので、デバイスの表記は日本語にします。

それと念話は○で、デバイスは『』にします。

第七話

F W達に今日の任務内容を伝えてるはやて

「今まで謎だったガジェットのプロ作者、およびレリックを集めるのが違法研究で広域指名手配されてる次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティを線に捜査を進める」

「こっちの捜査は、主に私が進めるんだけど、一応みんなも覚えておいてね」

F W達に言うフェイト

「はい！」

FW達が返事をする

「それで今日向かう所はここホテル・アグスタ」

「骨董美術オークションの警備が今日のお仕事だよ」

紫苑が質問する

「なんでオークション会場の警備なんですか？」

するとリインが

「取り引き許可が出てるロストログアがいくつも出品されるので、その反応をレリックと誤認したガジェットが出てきちゃう可能性が高い、との事で、私達が警備によべれたです。」

なるほど、と言いながら納得してる紫苑

「この手の大型オークションだと、密輸取引の隠れ蓑にもなった
りするし、いろいろ油断は禁物だよ」

画面のコンソールにシグナム達が映し出し説明を続けるはやて

「現場には昨夜から、シグナム副隊長、ヴィータ副隊長、他数名の隊員がはってくれてる」

「私達は建物の中の警備に当たるから、前線は副隊長の指示に従ってね」

「はい！」

するとキャラロが手を挙げ

「あの、シャマル先生さっきから気になってたんですけど、その箱って…」

キャラロがシャマルの足元にある箱を指差した。

「ん・・・あつ、これ？ふふっ隊長達と紫苑君のお仕事着」

会場内

「オークション開始まで後どれくらい？」

自分のデバイス、バルディッシュに聞くフェイト

『3時間27分です。』

そのまま廊下を歩いていったフェイト

「あれ？」

ちょうどフェイトが通りさった通路の横で二人の男が喋っている
その内一人の男が首をかしげ呟き、もう一人の男が

「どうかされました、先生？」

「ああ、いえ」

（でも、今日は八神部隊長の守護騎士全員集合かあ）

念話で、ティアナと喋るスバル

（そうねえ、あんた結構詳しいわよねえ、八神部隊長とか副隊長達の事）

（うん、父さんやギン姉から聞いた事位だけど、八神部隊長が使ってるデバイスが魔道書型で、その名前が夜天の書って言う事、副隊長達に、シャル先生、それにザフィーラは、八神部隊長個人が保有してる特別戦力だって事、で、それにリイン曹長合せて六人そろえば、無敵の戦力だって事、まあ八神部隊長達の詳しい出自とか能力の詳細は特秘事項だから私も詳しくは知らないけど）

あらかたの説明をするスバル

（レアスキル持ちの人はみんなそうよね）

（ティアナなんか気になるの？）

（別に）

（そう、じゃあ、また後でね）

そう言い念話きるスバル

スバルとの念話切った後一人で考えるティアナ

六課の戦力は無敵を通り越して明らかに異常だ、八神部隊長がどんな裏技使ったのか知らないけど、隊長各全員オーバーS、副隊長でもニアSランク、他の隊員達だって前線から管制官まで未来のエリート達ばかり、あの年でもうBランクを取ってるエリオと、レアで強力な竜召喚師のキャロは、二人ともフェイトさんの秘蔵っ子、危なっかしくはあっても潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバックアップもあるスバル、やっぱりうちの部隊で凡人はあたしだけか、けどあたしにはそんなの関係ない、あたしは立ち止まる訳にはいかないんだ。

「あそこか・・・おまえの探し物はここには無いのだろうか？」

かなり大柄な男が隣の薄い紫色の髪をした少女に問いかける

「何か気になるのか？」

問いかけられた少女は小さく頷き、飛んできた虫を指に止め、
飛んできた虫の情報を話す少女

「ドクターの玩具が近づいて来てるって」

第七話（後書き）

全く紫苑を出せなかった・・・

次は出せるように頑張るので次回もお願いしますm（
）m。

★
メン

b
y
ラ
キ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3612k/>

魔法少女リリカルなのはSS 紫電のキバ

2010年10月10日16時44分発行